

## うれしく思えた日から

ふと思うことがあった。

さしみの下にしかれた大根、シューマイの上のグリーンピース、からあげにそえられたレタス、メインの料理の引き立て役の野菜たち。色どりをそえるとか、えいよのバランスを整えるとか、そこにはちゃんと意味があるはずなのに、目立たなくてなんだか自分とにているなど。

ぼくは、勉強のときはまあふつう。せいかくは、自分でもわるくない方だと思う。でも、すすんで何かをするのは、ちょっと苦手で、いちおうみんなといっしょに行動するけれど、中心になることはない。

運動も、まあふつうと言いたいところだけど、てつぼうは、何度やってもさか上がりができなかった。みんなは、らくらくできるのに……。とびばこは、なんとかとべる。でも、いつもおしりをこする。しっぱいするとますますきんちようして、次には、ゴツンと音がする。

(いいところなんてひとつもない。)

そう思っていたのだけれど、ある日とつぜん、ぼくがぼくであることをうれしく思える日がやってきた。

それは体育たいいくの時間のソフトボール投げなのときだった。ボールは三十メートルをこえていた。みんなは、

「うおーっ。」

と声をあげ、

「しょうくん、すごいなあ。いいかたしてるね。」

と言って、かたをたたいていっしょによるこんでくれた。

クラスメイトのけい君が

「ぼくらの野球やきゅうチームに入りなよ。」

とさそってくれた。第二だい回目も三十メートルをらくらくこえた。

「あなたは、野球やきゅうにむいているかもしれないね。」

と、たんになの川村先生も言ってくれた。

これまで気づかなかったけれど、ぼくにもいいところがあったんだ。

その日の夕飯ゆうはんのとき、



「ぼく、野球をやってみたいんだけど。」

とボール投げのことを話しながら、家族に相談してみた。自分から何かをやりたいなんて言い出したのは始めてだったから、お父さんもお母さんも大さんせいしてくれた。

「あのチームの練習はとてもきびしいみたいよ。でも、がんばって。しょうのいいところを生かしていいたら、イチロー選手みたいになれるかも。」

と姉さんも、おうえんしてくれた。

次の土曜日から、ぼくは、練習にさんかした。練習はとてもきびしかった。投げるだけじゃ野球はできない。足こしを強くする走りこみもすぶりもノックも、へとへとになるまでがんばった。

チームに入って、もう一年になる。あのとき、みんなが言ってくれた「いいかたしてるね。」の言葉が、ぼくの元気のもと、おまじないの言葉になった。そして、いつも出られるとはかぎらないけれど、試合にも出してもらえるようになった。

ベンチにいと、ときどき、さしみの下の大根や、シューマイのグリーンピースや、からあげのレタスを思い出すことがある。



でも、前みたいに、目立たないとは思わない。それどころか、それぞれにいいところを生かしている大事な一人ひとに思えてきた。ぼくもそうだ。

いつの間にか、ぼくは、さか上がりができるようになっていた。とびばこもらくらくとびこせるようになった。五十メートル走のタイムもあがった。もう一年前のぼくじゃない。

おまじないの言葉は、ぼくを元気にして、いいところをたくさん**の**ばしてくれた。

ぼくのいる野球チームには、ずっと野球を続けて、甲子園こうしえんに出

場した先ぱいがたくさんいる。

ぼくも甲子園へ行けるかもしれない。

もしかしたら、イチロー選手みたいに大リーグでかつやくする日もゆめじゃない。